

復興期の秩父札所

佐藤 久光

Chichibu FUDASYO in Revival Period

Hisamitsu SATO

はじめに

春と秋の秩父路は行楽をもとめる東京周辺の人々で賑わう。秩父は周囲を山で囲まれ、その山嶺から流れ出る水を集めて河川が走り、山あり谷あり、温泉の湧き出る景勝地であった。その行楽客に混じって観音霊場をめぐる巡礼者の姿が見られる。秩父盆地の一角に観音霊場が成立したのは室町時代中期の長享二年（一四八八）以前とされている。その後、西国、坂東霊場と併せて日本百観音霊場に発展したことで、江戸時代には江戸市民が多く押し寄せ、多数の巡礼者で賑わった。

しかし、明治期に入ると政府は宗教政策を大きく転換し、神仏判然令や廃仏毀釈、修験道解散を敢行したので、仏教寺院は衰退し、荒廃していった。それに伴って、観音札所も住職が神官に転職したり、還俗して無住の寺院が増え、著しく荒廃する。その状況は大正期、昭和期と続き、戦後の社会復興まで続くことになった。

明治期から戦後の復興を遂げる昭和四十年代までは、秩父札所が荒廃していたことで記録や資料が少なく、その実態は不明であった。本稿では昭和二十年代から五十年代までの秩父札所に焦点を当て、当時の札所の状況と巡礼の実態を説明する。

一 研究の所在

秩父霊場は西国、坂東霊場と並んで日本三大観音霊場の一つとして古くから多くの巡礼者があった。江戸時代の秩父巡礼については、大宮郷を支配していた割役名主の記録によると、午歳の開帳時には五万人を超える巡礼者があり、大いに賑わったことがわかる。しかしながら、明治時代に入って宗教政策が大きく変化し、神仏判然令、廻国修行の六十六部の禁止令、修験道解散令の施行や廃仏毀釈で秩父札所は大きな打撃を受け、急速に衰退して行った。例えば、第十五番札所・蔵福寺は神仏分離令で廃寺にされ、住職は復飾し、その跡地に秩父招魂神社が建立され

た。また、明治五年の修験道の解散令によって、秩父霊場の開創や巡礼の宣教に大きな役割を果たし、江戸への出開帳にも貢献した修験道の僧侶はその地位を追われた。第十四番札所・今宮坊は神官に復飾したが、第十八番札所・長生院（神門寺）、第二十四番札所・明星院（法泉寺）、第三十一番札所・観音院の修験者は還俗した⁽²⁾。その結果、札所寺院には住職が不在の寺院が生まれた。政府は無住の寺院を廃止する布告を発し、札所寺院は廃寺されるところまで追い込まれた。しかし、仏像や什器は本寺の法類たちが最寄りの寺院で祀り、堂宇や建物は個人や有志の所有として維持された⁽³⁾。第三十一番札所・観音院は形式上は近くの禅宗・光源寺の住職が兼務し、実質的には還俗した近藤法観一族や地域住民が管理し、寺院の存続を図ってきた。それでも寺院の荒廃は避けられなかった。明治十八年、息子の追悼供養のために秩父霊場を巡拝した探検家の松浦武四郎は、『乙酉後記』の中で荒廃した第二番札所・大棚山真福寺の様子を次のように述べている⁽⁴⁾。

二（仁）王門。本堂。共に大破す。本尊正観音。傍に二丈計の羅漢の像数十牀有りて手足散乱。彩色剥落す。間に五百羅漢有しと云。

側に破（れ）たる布団を被り老僧寝たる、頗る貧地（寺）なりしが逐（這）出して余に洪茶を出す。（中略）僧語（りて）曰、当霊場

の大黒何れも饑饉年の貧乏神の嬬の如きし物計なるが、（後略）

このような有様であったことから巡礼者の数も少なかった。その後、明治中・後期には日清、日露戦争における出兵士の武運長久の祈願や戦死者の追悼供養のために巡礼に出かける人が見られたが⁽⁵⁾、それは一時的なものに過ぎなかった。その後も各札所は本堂や仁王門が火災で焼失する不運が重なる。昭和期に入っても経済不況と、不安な政情が続く中で第二次世界大戦に突入し、敗戦による生活苦で庶民が巡礼に出かける環境ではなかった。

秩父巡礼が本格的に復興する兆しを見せるのは昭和四十年代に入って

からである。その理由は戦後の社会復興が終わり、高度経済成長期に入り、経済的な余裕と信仰心の再認識が芽生えてきたことである。今一つは昭和四十一年は午歳にあたり、秩父観音霊場は総開帳が行われたことである。その上、昭和四十三年に西武鉄道が秩父まで延伸し、都心から約二時間で往来できるようになったことなどが挙げられる。

筆者は近年の秩父巡礼について調査研究を行い、幾つかの報告をしてきた⁽⁶⁾。しかしながら、戦後、秩父巡礼が復興するまでの昭和二十年代から四十年代の時期の実態は不明であった。そこで、本稿では昭和二十年代から五十年代にかけての秩父霊場の復興の状況と、巡礼者の動向を考察する。その手懸かりは、当時の札所の様子を伝えていた『秩父新聞』の記事を中心に、『埼玉新聞』、『朝日新聞』、そして老僧からの聴き取り調査を基にしている。

『秩父新聞』（週刊）は昭和二年に創刊の地元新聞で、秩父地方の産業であった繊維業界を対象とし、全国に広がっていた繊維関係者に購読されていた。同紙は戦時中休刊していたが、昭和二十一年に第十四番札所・今宮坊の住職を務めていた田島凡海師が復刊し、秩父霊場に関する記事を多く掲載するようになった。田島師は独自に「観音奉賛会」を結成し、霊場の復興と文化財の保護、及び宣教活動に力を注いだ。田島師は郷土文化にも造詣が深く、秩父地方の民俗資料を多数収集し、秩父市民俗博物館の初代館長も務め、昭和四十四年に死去している。

『秩父新聞』に掲載された秩父霊場に関する記事は、霊場の復興状況や総開帳の準備などを報じている。特に十二年毎に行われる午歳の総開帳時には大々的に報道している。その紙面は「観音奉賛会」を主宰する師の意気込みが反映されているが、田島師と札所三十四カ所で形成する「札所連合会」との関係は良好ではなかった。『秩父新聞』の記事には同師の先行した記事も少なくなく、記事内容には事実以上に誇大視した点も見られる。この点は当時を知る老僧などからの聴き取り調査を行い、

事実を点検しながら考察する。

二 秩父霊場の開帳状況

秩父霊場が賑わうのは十二年毎に開催される午歳の総開帳である。この傾向は秩父巡礼の最盛期であった江戸時代でも同様であった。総開帳は午歳以外にも行われており、昭和期から平成期までの総開帳はどのようであったか、その概略を述べると次のようになる。

- (一) 昭和五年の午歳総開帳は三月一日から五月三十日までの三カ月間行われた。
- (二) 昭和十七年五月に午歳総開帳が行われたが、第二次大戦中のために人出はなかった。
- (三) 昭和二十五年十月に「秩父市制記念総開帳」が行われ、秩父市内にある札所は各寺院での「居開帳」を、それ以外の荒川村、皆野町、吉田町、小鹿野町に所在する二十九番以降の札所は秩父市内の寺院で「出開帳」を行っている。第二十九番、第三十番、第三十一番札所は第十九番札所・龍石寺の本寺にあたる宗福寺で、第三十二番、第三十三番は第十三番札所・慈眼寺で出開帳している。⁽⁷⁾
- (四) 昭和二十九年の午歳開帳は、四月一日から同三十日までの一カ月間行われた。第三十一番、第三十二番、第三十三番札所は小鹿野町・十輪寺での「出開帳」であった。
- (五) 昭和四十一年の午歳総開帳は四月八日から五月八日までの一カ月間行われた。第三十一番札所は巡拝道路が工事中のために、山麓の大日堂での「出開帳」であった。
- (六) 昭和五十三年の午歳総開帳は三月一日から十月三十日までの八カ月間行われた。
- (七) 昭和五十九年には、秩父観音霊場開闢七百五十年記念総開帳が

三月一日から十月三十日まで八カ月間行われた。

- (八) 昭和六十一年十月十七日から二十九日まで東京浅草・松屋デパートで「総出開帳」を行った。この開帳は江戸時代以来の東京での出開帳で大いに反響を呼び、多数の参詣者があった。

- (九) 平成二年の午歳総開帳は三月一日から十一月八日までの八カ月余り行われた。

- (十) 平成八年には「日本百観音霊場報恩総開帳」として四月一日から六月三十日までの三カ月間行われた。

- (十一) 平成十四年の午歳総開帳は三月一日から十一月三十日までの九カ月間行われた。

以上のように十二年毎の午歳の総開帳に加え、記念行事などに総開帳と出開帳が行われている。この総開帳が秩父霊場の復興に弾みをつけることになった。次にその状況を詳しく検討して行くことにする。

三 昭和二十年代の秩父札所

昭和期に入って最初の総開帳は昭和五年に行われたが、札所寺院も明治以降の荒廃が続き、その上世相もよくなく、総開帳は行われたものの巡礼者は少なかった。その巡礼者は秩父郡内の熱心な観音信者だけで、県外からの巡礼者はなかった、と古老たちは言う。やがて社会情勢は悪化の一途を辿り、昭和十七年の総開帳は戦争中の開催で人出は殆どなかった。⁽⁸⁾

戦後になり、昭和二十五年四月に秩父市は市制を敷いたのを記念して、市は札所連合会に要請して十月に一週間の総開帳を行った。その詳しい状況は資料も少なく不明である。その前年の二十四年には千葉県からの依頼で「出開帳」の開催が計画され、復興の期待がかかったが、『秩父新聞』昭和二十四年六月二日付第538号、観音像の輸送費、人件費などの問題で実施されなかった。この時期の秩父札所は明治以来

の荒廃と、敗戦の打撃で荒れ果ていた。当時の状況を『秩父新聞』は次のように述べている。

(前略) 然かし札所の中には住職もなく檀徒も全く熱意を欠き、あたらし古刹が荒れるに任せて放任され、雨は漏り建物は腐朽し見る影もなく荒廃し、さながらお化屋敷の如く惨状を呈しているものがあり其の最も甚だしいのが日野沢村札所三十四番日野沢山水潜寺だ。

この有様を見た巡拝者が何とかして同寺の復興を計りたいと水潜寺改修の声が台頭している。又長瀨の某有力者は札所の長瀨移転を熱心に希望している者がある、…… (昭和二十四年四月二日付)

これは当時札所は無住であったり、本堂の伽藍の荒廃が激しく、特に水潜寺はその例として取り上げられ、しかも復興のために景勝地である長瀨への移転話があったことを報じている。巡礼者については、観音講を中心とした巡礼が始めたことを伝えている。

秩父名物の一つになっている霊場巡拝は年々盛んになって来たが愈々今年も来る十日秩父町宗福寺住職井上孝全師が主宰する秩父観音参拝講百名が巡拝に出掛けるのを皮切りに、十一日には横瀬村観音講百五十名、四月五日には秩父町観音講八百名が巡拝に出掛けることに決定した。

(三月二日付、井上孝全師によれば巡礼は実施された)

チリン／＼と鈴の音が春風に乗って流れ、野面には蝶が舞い空には雲雀のコーラスを聞く長閑な春の下で秩父観音講では札所巡りを四月五日から九日まで左の日程で行うことになった。講金三十円、納経料五円、小鹿野方面へ行く者は五日の集合の折旅館か親戚へ宿泊かを世話人に申し出る事。尚弁当四食分携帯の事(四月二日付)

このように巡礼者の動向は、地元の観音講の信者であり、その人数にも多少過大視され、実際にはそれほど多かったとは言えない。その後、

各寺院の復興などを伝える報道が個別的に見られるが、秩父札所全体が復興の兆しを見せるのは後々である。

昭和二十九年の午歳総開帳に関して、『秩父新聞』はそれ以後の同四十年、同五十三年の総開帳をはるかに上回る記事の掲載をしている。その理由は幾つか挙げられる。その第一は、戦後の平和な世での初めての開帳であったこと。第二に、この年は文暦元年甲午(一二三四)の札所開闢以来六十回目の総開帳にあたること。第三に、社会復興に伴って札所寺院も徐々に復興し始め、民衆の心も宗教に関心を寄せるようになって来たこと。第四に、開催期間中に秩父新聞社主催の「秩父観音霊場宝物展」が秩父市内のデパートで開催されたこと。その上、総開帳は地元の商業活動や観光客の吸引などの期待を抱かれたこともある。この点で昭和二十九年の総開帳は極めて重要な位置付けとされた。それが記事の多さに関係したものと考えられる。その報道記事を内容的に整理すると次のようになる。

- (一) 各札所の堂宇、庫裡の改修及び境内内外の整備状況。
- (二) 札所寺院からの木札、石札の発見。
- (三) 商店街、商工会、銀行、鉄道会社による宣伝及び協賛。
- (四) 檀信徒の札所寺院への寄進。
- (五) 秩父新聞社主催の「秩父観音霊場宝物展」の開催。
- (六) 札所連合による千葉県、群馬県での宣教活動。
- (七) 遠隔地からの巡拝申し込み。
- (八) 巡拝列車の運行と巡拝団体バスの運行。
- (九) 札所三十一番、三十二番、三十三番は小鹿野町・十輪寺での出開帳及び十輪寺の開帳。
- (十) 今回の開帳の問題点。

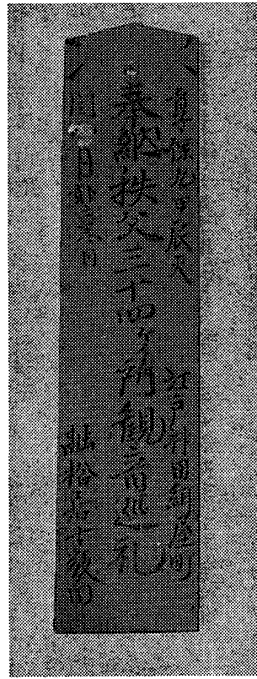
以上は『秩父新聞』が一月十二日から五月十一日までの五カ月間に報道した記事を整理したものである。その殆どは開帳前の三月までに報じ

た記事である。そこで、各項目に今少し検討を加え、当時の状況を捉えることにする。

(一) 各札所の堂宇、庫裡の改修及び境内の整備

各札所は個別的に堂宇、境内の改修、整備を行ってきたが、開帳を機に特に力を入れて改修、整備を行っている。第十六番札所・西光寺は本堂の大修理を総工費百十万円で行い、総開帳に間に合わせようとしている(二月六日付)。第二十番札所・音楽寺では尾田蒔村の秩父市への合併を記念して「松風千人講」を結成し、第一回の事業として同寺の客殿の改修と境内の整備の計画をしている(三月二日付)。その上で、総括的に「各寺院とも一斉に堂宇境内の改修、整備に乗り出していたが、いずれもこの程一斉に修復を終了、みちがえるばかりの荘厳な新装をこらして」(三月九日付)と述べている。ただし、当時の状況から考えて改修、整備事業は財政事情もよくなく、一時しのぎの改修に過ぎないと捉えるのが妥当である。改修、整備は次の昭和四十一年の総開帳に大々的に行われる。

(二) 木札、石札の発見



納札

札所の本堂の改修で過去の歴史を知る貴重な資料が発見された。

その一つは第十六番札所・西光寺の本堂の改修の折り、屋根裏から江戸時代の納札が発見されたことである。納札はいずれも木片に筆書きされ、享保九年(一七二四)や延享三年(一七五〇)の札が出てきた。併せて古文書も見つかり、そのことから秩父地方に現存する仏像、什器、梵鐘などの仏具類の多くは江戸市民から寄進・奉納されたものであることが

判明した(二月十六日付)。今一つは、第二十九番札所・長泉院から「石札」が発見され、秩父郡下で初めてのものとし考古学的に注目を浴びていることである(二月十六日付)。

(三) 商店街、商工会、銀行、鉄道会社の宣伝及び協賛

午歳の総開帳に対して地元の商店街や有力企業は歓迎の行事を催した。開帳前に足利銀行は、同行事を祝して観音像をイラストした宣伝ポスター数千枚を寄進している。そのポスターは東京都内や近県で貼られ(二月十六日付)、秩父鉄道、西武鉄道、東武鉄道の各駅と電車内にも掲示された(三月九日付)。秩父市東町、番場町の両商店街は店頭軒下に「祝歓迎」の五彩提灯を掲げる準備をしている。西秩父の拠点である小鹿野町では近郊の第三十一番札所、第三十二番札所、第三十三番札所が同町の十輪寺で出開帳を行うので商店街が花提灯を飾り、協賛大売り出しなど巡拝者を歓迎する準備をした(三月九日付)。更に秩父郡下の旅館、鉱泉旅館では総開帳に協力し、巡拝者に格安のサービスや入浴で歓待することにした。

(四) 檀信徒の札所寺院への寄進

総開帳にあたり、熱心な檀信徒は浄財の寄進や堂宇、庫裡の改修に協力を行った。その概略は次の通りである(三月九日付)。

- ① 高篠村織物業者が一番札所・四万部寺に座布団五十枚を寄進。
- ② 秩父市野坂の織物業者が十二番札所・野坂寺に本堂用幕一張り、小鹿野町十輪寺に直径五尺の提灯を寄進。
- ③ 秩父市東町果実店が十三番札所・慈眼寺に本堂用大幕一張りを寄進。
- ④ 秩父市東町菓子店が十三番札所・慈眼寺に薬師堂用荘厳一式の寄進の申込。
- ⑤ 秩父市東町住民が十三番札所・慈眼寺に供養塔姿(一万円相当)を寄進。

⑥ 秩父市野坂住民二人が十二番札所・野坂寺の薬師堂の修理を申し出る。

⑦ 秩父市の製材業者が十一番札所・常楽寺に提灯を、秩父セメント工場も荘厳一式を寄進。

(五) 秩父観音霊場宝物展の開催

昭和二十九年の午歳総開帳を記念して秩父新聞社主催の「秩父観音霊場宝物展」が、秩父市の八尾百貨店の三階ギャラリーで四月十五日から十九日までの五日間行われた。この宝物展は各霊場札所や秩父新聞社が所蔵しているものを展示したものである。出陳予定の宝物は次の通りである。

◇ 江戸出開帳日誌(明和、安永年間の二冊) ◇ 江戸出開帳日誌(文化年間全二冊) ◇ 一切蔵経、大般若経各寄進状二通 ◇ 日本百観音を記す天文五年の納札及びその他の納札 ◇ 秩父観音番付け(長享二年) ◇ 秩父霊場巡拝記 ◇ 秩父三十四所観音霊験円通伝(全九巻) ◇ 観音霊験記絵図

この展示会には県郷土文化会員の参観などがあり、そのほかの団体の申し込みなどで盛況が予想されていた。しかし、『秩父新聞』は展示会の開催状況を続報として伝えていないので、その様子は判明しない。古老などの述懐によると、同展示会は盛況とは言えず、限られた博識家に関心をもった程度であったと言われる。昭和二十九年当時の状況を考えると、庶民が宗教文化に関心を示すには縁遠く、盛況とは言えなかったと捉えるのが妥当であろう。

(六) 札所連合会による千葉県、群馬県での宣教活動

総開帳を盛り上げるために秩父札所連合会は、二月に近県に出向き、巡拝者を誘致する活動を展開した。その一つは同連合会の会長たちが千葉県下に出張し、スライド写真を携帯して巡拝を促した。千葉県には「一万人講」という観音講が結成されており、その講中たちへの宣教活

動であった。この点を札所連合会々長で第十三番札所・慈眼寺住職柴原保教師は、先代住職が千葉県に出向き、宣教を行ったことを語ってくれた。今一つは隣県の群馬県での宣教活動であった。第二十三番札所の住職が八十一歳の老体を押して群馬県・草津地方に出かけ、秩父霊場への巡拝を呼びかけた。群馬県は秩父地方とは古くから繊維産業で結びつきが深く、人の往来が盛んであった。その関係から群馬県は巡礼者の誘致に適していた。

このような経緯から、現在の巡礼者の出身別でも埼玉県、東京都について千葉、群馬両県の人々が多い。

(七) 遠隔地からの団体巡拝の申し込み

総開帳には巡礼者は例年の二、三倍に増えるが、そこには遠隔地からの巡礼者も含まれている。開帳前に秩父新聞社や札所連合会に団体の巡拝の申し込みが寄せられている。例えば、名古屋の壽仙会が秩父観音巡礼に百数十名がくることを伝え、その日程を次のように報じている(三月二日付)。

一行は四月十一日名古屋を発車し長野行き信州路を経て篠ノ井駅乗りかえ信越線にて(中略)熊谷駅乗換て一路秩父市に向かい秩父駅下車、秩父市主催の湯茶の接待を受けたのち市内周辺の札所を参詣おえ同夜は三峯神社山坊に一泊、翌十二日は早朝起床、大輪駅より大型バスに分乗して各札所を参詣卅四カ所の霊地詣りを終えて同夜は長瀬に一泊、(中略)十六日夕刻、郷里に帰省する(後略)

また、神奈川県鎌倉市長谷の男性が秩父新聞社を訪ね、団体巡拝の申し込みをしたことも報じられている(三月二十五日付)。これらを総括する形で、「目下連日にわたり郡内はもとより遠く、東京、千葉、群馬県方面から熱心な信徒や講中から団体巡拝の報がもたらされている」(三月二十五日付)と述べ、遠隔地からの巡礼者を伝えている。

しかし、これらの遠隔地からの巡拝者が実際に秩父に来たのかは、そ

の後の続報がないことから、その事実是不明である。不測の事態が起らない限り実施されたものと推測されるが、巡拝団の数や巡拝者の人数は過大視され、実際は報道記事より少ないと見られる。

(八) 巡拝列車と巡拝団体バスの運行

総開帳に合わせて巡拝者を呼び込む企画には、東京と秩父を結ぶ直通列車を運行しようとするものがあつた。計画段階の報道によると次のように企画されている(二月九日付)。

私鉄浦山口駅と東京間を直通する巡拝列車を四月一日から期間中毎日直通乗入する事になり、廿八番橋立寺住職町田兼義氏名で既に東鉄局長宛連絡申請が出されている。東鉄でも巡拝列車は斯界空前のことであり、大きな関心の的となっているという。

ところが、当初計画された巡拝列車は実際には運行されなかった。東京と秩父を直通で結ぶには、当時の国鉄と秩父鉄道が共同であつたなければならない。秩父鉄道に当時の資料を問い合わせると、巡拝列車が運行されたとする記録は残っていなかった。秩父鉄道の四月十七日付の社報には「自然科学列車」と称する臨時列車が運行され、秩父市、郡内の小、中学生の利用があつたことが記されているのみであつた。また、古老の話によると、巡拝列車の計画は確かにあつたが、巡拝者を確保することが困難などの理由で中止された、と言う。

他方、秩父新聞社は信者の要望に依えて四月十一日、十五日、二十三日の三日間、新型バス(四十人乗り)を運行する旨を伝え、団体募集を行っている。巡拝コースは三十四番札所から始まり一番札所に到る「逆打ち」で廻り、そのバス乗車賃は三百円となっている(三月九日付)。これについても続報はなく、実施されたかは不明である。当時舗装もされない道路事情や車の利用状況を考えると、その計画が実施されたのかは疑問が残る。しかし、既述のように名古屋の巡拝団がバスで廻る計画がなされていることを考えると、昭和二十九年頃からバスによる巡拝

が開始するようになったという手懸かりになる。因みに四国遍路では昭和二十八年に伊予鉄バス会社によるバス遍路が始まっている。¹⁰⁾

(九) 札所三十一番、三十二番、三十三番の開帳と十輪寺の開帳

第三十一番札所・観音院、第三十二番札所・法性寺、第三十三番札所・菊水寺は秩父霊場でも交通の便が悪く、しかも小鹿野町民の要請を受けて同町の十輪寺で開帳を行うことにした。また、十輪寺も住職の慶事を兼ねて秩父札所の開帳期間中、十一面観音を開帳することにした(三月九日付)。

秩父札所の出開帳は江戸時代から行われ、江戸市民に大いに人気を博した。昭和二十五年の秩父市制定記念開帳でも、秩父市以外の札所は秩父市内の寺院で出開帳を行っている。今回も巡拝者の便を考え、西秩父の中心地であつた小鹿野町での出開帳であつた。

出開帳に合わせて、十輪寺が開帳に参加したのは次のような経緯からである。十輪寺は秩父観音霊場三十四カ所には入っていない。ところが、明治維新の神仏判然令で秩父妙見神社にあつた当時第十五番札所・蔵福寺は廃寺になった。蔵福寺に祀られていた本尊は十輪寺の末寺・泉蔵院が同じ妙見神社の境内にあつた縁で十輪寺に譲渡された。¹¹⁾しかし、その後第十五番札所は少林寺が受け持つことになった。そのような事情で、開帳を機に十輪寺の本尊も開帳することになった。

(十) 開帳の問題点

開帳の準備が整い、やがて四月一日から開帳が行われた。その様子を伝える第一報は四月六日付に、「春の秩父路をいろどる。秩父午歳総開帳」は万全の準備とどのいよいよ去る一日全霊場卅四カ所が一斉に幕を明けた……四月の秩父札所は早くも観光客数十万の殺到が予測されている。」と伝えている。しかし、記事内容はこれまでの既報を繰り返しているだけで、具体的に巡拝者の状況を伝えていない。四月二十日付(第730号)も詳しい状況には触れず、概括的な報道として「……各

札所とも一斉に堂宇内外の整備改善をしたため、明治大正以来、空前の整備充実ぶりを見せて関係方面の注目を浴びて、参拝者も予想以上の盛況をおさめて札所開闢以来のにぎわいを呈している」と述べている。しかし、論調はそれとは裏腹に開帳の盛り上がりには欠けた点を提示しようとしている。その内容は、札所側の宣伝不足と札所寺院が観光業界とタイアップして多くの参拝者を集めるべきであった、と指摘するものである。それを強調するように関係者四名の談話も掲載している。その後の第731号、第732号には開帳に関する記事は一切報じられず、第733号に一読者の「秩父霊場宣伝私案」が載せられ、当時人気が出てきた映画を活用してPRをしたり、東京の仏具店にパンフレットを置いて配布するなどの案が述べられている。

このように『秩父新聞』の報道記事は開帳前と開帳中及び終了後とでは大きな隔りがあることが明確になる。それには新聞のもつ広報活動の性格から事前の報道に力点が置かれるとしても、開帳開始後はその詳しい状況が報じられず、その上で開帳の行事に批判的な記事が掲載されていることに疑問が残る。このことを念頭に入れて考えると、昭和二十九年の総開帳は『秩父新聞』が事前に報道したほどに盛り上がり、巡礼者も多くなかったと考えられる。

しかしながら、戦後初めて行われた二十九年の総開帳は、その成果に対する評価は別に、札所の堂宇、庫裡の改修、境内の整備が行われ、県外での宣教活動、ポスターの掲示、商店街の協賛の中で実施された。巡拝者も地元だけに限らず、県外からも訪れ、遠く名古屋からの巡拝団も見られたことになる。二十九年の総開帳は敗戦から十年目にあたる時期に行われ、それ以前の荒廃状況を考えると、札所復興への第一歩と位置付けることができる。

四 昭和四十年代の秩父札所

戦後初めての午歳総開帳が行われた昭和二十九年から十二年後の昭和四十一年に、恒例の総開帳が開催された。再び『秩父新聞』の記事を手懸かりに当時の状況を検討する。昭和四十一年一月十五日付(第1218号)から四月十五日付(第1227号)までに掲載された記事内容を整理すると次のようになる。

(一) 札所寺院の堂宇改修、境内の整備。

(二) 東京における総開帳のPR活動。

(三) 檀信徒の札所寺院への寄進。

(四) 巡拝者の申し込み状況。

(五) 巡拝者の募集及び巡拝バスの運行予定。

(六) 札所三十一番の出開帳

(七) 開帳の開始状況。

次に、その内容がどのようなものであったか、項目別に詳しく見てみる。

(一) 札所寺院の堂宇改修、境内の整備状況

開帳は寺院にとっては建物の普請、改修に檀信徒からの浄財を募る絶好機でもあった。今回は前回を上回る新築、改築、整備が大々的に行われた。札所の改修、整備状況は次のようになっている(三月十五日付)。

◇ 札所二番寺Ⅱ庫裡の新築 ◇ 三番寺Ⅱ観音堂修理。銅板ぶき屋根完工、内外整備 ◇ 六番寺Ⅱ堂内の修理 ◇ 八番寺Ⅱ本堂の修理

◇ 十番寺Ⅱ本堂修理、山門修理 ◇ 十三番寺Ⅱ堂内修理、荘厳具完備 ◇ 十四番寺Ⅱ水屋の新築 ◇ 二十七番寺Ⅱ本堂のカワ

ラぶき屋根大修理 ◇ 二十八番寺Ⅱ本堂改修 ◇ 二十九番寺Ⅱ同

◇ 三十一番寺Ⅱ道路整備中(総開帳中山麓の大日堂で出開帳を行

う) ◇ 三十二番寺Ⅱ観音堂改修 ◇ 三十三番寺Ⅱ本堂改修

札所三十四カ寺のうち、三分の一以上の十三カ寺が本堂を中心とした堂宇内外の改修、整備を行っている。これに加えて、従来から指摘されていた手洗い所がない、便所が汚いという不満を解消するために共同便所や手洗い所を設けることにした(二月十五日付)。堂宇などの改修、整備は建物の老朽化が進み、必要に迫られていたこともあるが、経済成長で庶民の生活にゆとりが始め、寄付金を募りやすい背景があった。また、宗教団体・解脱会秩父支部は巡礼の道案内の便宜をはかるために「指導標」(道標)三百本を建立することを決めている(二月十五日付)。

(二) 東京における総開帳のPR活動

総開帳への巡礼者を引き寄せるために、遠隔地の人々への宣伝活動が行われた。今回は東京都内にカラーコルトンを設置し、巡礼者の誘致を図っている。それを『秩父新聞』は次のように報じている(二月十五日付)。

観光協会、観音奉賛会では東京の国際観光会館の埼玉観光案内所に原色のカラーコルトンを中心にポスター、石仏、巡礼道具などを展示してPR中であり、秩父鉄道でも銀座案内所にカラーコルトン、ポスターを展示し、団体巡礼をあっせんすることになった。

この活動については『埼玉新聞』(一月二十九日付)でも報じられている。同紙は「早春の秩父路へ 札所めぐり東京へPR」という見出しで次のように述べている。

(前略) カラーコルトンは、ポカポカした陽春の野道を歩く巡礼をカラー写真であしらったもので、タテ七〇センチ、ヨコ六〇センチ。内側から光があたる仕組みになっている。

制作費は一基三万円。東京八重洲の東京物産あっせん所と銀座の秩父鉄道観光案内所に設置される。

東京での総開帳の宣伝は、人口が集中する大都市だけにその効果は高いことを見込んでのものである。この狙いは江戸時代に江戸で度々出開

帳を開き、盛況であった経緯からも窺い知れる。

(三) 檀信徒の札所寺院への寄進

札所が堂宇内外の改修、整備を行った背景には、その財源の見通しがあつたからである。檀家をもたない札所寺院が多い秩父霊場にとっては、改修、整備の費用は信者や篤志家からの寄進に頼らざるをえなかった。既述した十三カ寺の新築、改修は寄進の浄財による。今回は寄進の報道記事は少なく、二、三にとどまっている。「信徒の寄付で面目一新の十四番」という見出しで、札所十四番に秩父市内の織物業者が畳十四枚(二万五千円相当)、別の織物業者が花提灯一对(二万五千円相当)、食品店主が御戸帳(六万円相当)を寄付し、更に町内有志が水屋の新築を奉納したことが掲載されている(三月十五日付)。

(四) 巡拝者の申し込み状況

総開帳の準備が進む中で巡拝を希望する団体の申し込みが相次いでいる。二月十五日付の段階では以下の団体の申し込みがあつた。

- ◇ 四月九日～十日：埼玉県郷土会 ◇ 四月十日～十一日：西善寺講
- ◇ 四月十二日～十三日：地元講 ◇ 四月十三日～十四日：地元講
- ◇ 四月十五日～十六日：野坂寺講 ◇ 四月十七日～十八日：地元講
- ◇ 四月二〇日～二一日：久那講中
- ◇ 四月二三日～二四日：小鹿野講中
- ◇ 三月二五日～二七日：山形交通観光社(一〇〇名)
- ◇ 五月五日～七日：大阪以和貴会
- ◇ 五月一日～二日：岩槻市慈恩寺講

これらの申し込みは主に地元の観音講であるが、それ以外にも山形県や大阪の講中も申し込みがあることがわかる。そのほかにも、変わったところでは「宮地の立正校正会」で宗派を超越して巡礼を計画と報じられている。

(五) 巡拝者の募集及び巡拝者バスの運行

秩父観音奉賛会は巡拝者を募集し、その巡拝者をバスで案内しようとする計画を進めている。その状況を具体的にみると、その一つは、観音奉賛会と「埼玉県郷土文化会」との共催での巡礼募集である。その要項は次のようになっている。

本年は秩父観音霊場午歳総開帳が四月八日より三十日間行われるのでこの間秘仏の公開される好機であるので四月九日、十日の二日間観音順礼会員を次の規定で募集中です。ふるって御申込下さい。

- 一日 時 四月九、十日の二日間、第一日秩父駅前十時出発
- 一 コース 一番から二十五番まで第二日三十四番から二十六番迄
- 一 会 費 金参千貳十円也(但二日間バス代、宿料、朱印料、納経料、心付一切)

一 中食は各自参のこと

一 五十六名で満員の為先着でメ切り (後略)

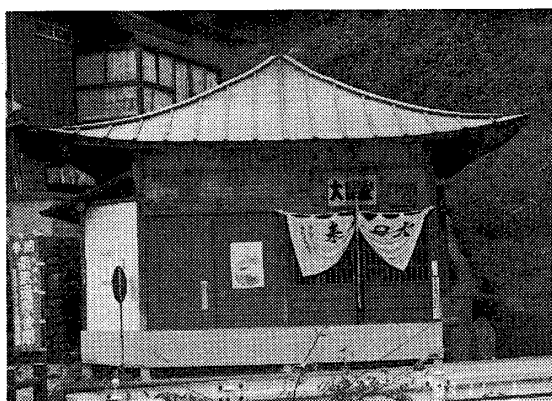
今一つの巡礼会員の募集は、秩父観音奉賛会が独自に行うもので、日時は期間中毎日となっている。その要項は次の通りである。

(前略) 四月八日より三十日間この期間巡礼会員を秩父観音奉賛会では募集中、マイクロバスを利用するので殆んど徒歩はありません。会費は金貳千貳百円也、その内訳は朱印料一ヶ寺三十円也で三十四ヶ所で千貳拾円也、二日間のバス代と納経帳、運転手の心付、茶代等一切です。(後略)

巡礼会員の募集広告を手懸かりにすると、当時の巡礼の状況がわかってくる。それによると、バスを利用して二日間の巡礼をする場合、二〇〇〇円から三〇〇〇円余りの費用になる。その内訳は朱印料三〇〇円であり、三十四ヶ所で一〇二〇円となる。バス代、納経料、その他の経費は二二〇〇円となっている。但し、宿泊する場合はその分が加算され、単純に計算すると八二〇円増しになる。これらの費用を当時の貨幣価値や

物価と比較してみると、昭和四十一年頃は都バス一区間二〇円、民泊一泊二日二食付きで一五〇〇円、白米一〇キログラム一〇二五円、かけそば一杯五〇円、ラーメン八〇円、おみくじ二〇〇五〇円であった¹²⁾。これらの価格からしてバス代など二日間の経費は安く抑えられている。しかしながら、地元秩父以外の人は、秩父との往來の交通費が別にかかった。当時の社会環境からして生活費とは別に遊興費として三〇〇〇円余りを支出することは大きな出費と見られる。因みに昭和二十九年の総開帳時には、バス巡拝の費用は二日間で三〇〇〇円であり(『秩父新聞』第726号)、一〇倍前後に跳ね上がっている。実際にバスを利用した巡拝者がどの程度あったかは判明しないが、車・バスを利用した巡礼が開始たことが知れる。

(六) 札所三十一番の出開帳



大日堂

昭和二十九年の総開帳では第三十一番札所、第三十二番札所、第三十三番札所は交通の便が悪いことから当地方の中心地小鹿野町・十輪寺で出開帳を行った。今回は札所三十一番だけが出開帳を行うことを報じている(二月十五日付)。それは第三十一番札所・観音院に通じる道路が險しく車も通行できないので、橋を永久橋に架け替え、車が通れるように改修を行っていた。そこで山麓の大日堂に本尊を移して開帳する事情があった。観音院の奉賛会々長を務めた故近藤昌一氏はかつて大日堂に参拝した記憶があると述懐している。秩父札所の多くは地形的に險しい所にはないが、第三十一番札所は旧道から徒歩で山

道を登り一時間余りの難所であった。巡礼者の便利を配慮して道路の改修工事の中のために開帳となった。

(七) 開帳の開始状況

開帳が始まってからの第一報は、四月十五日付(第1227号)に掲載されている。それは「秩父観音札所総開帳はじまる 秩父谷は巡礼で賑わう」という見出しで次のように述べている。

秩父三十四番観音札所の総開帳が釈迦の誕生日を祝う四月八日の花祭りからはじまった。この日から向こう一カ月間にわたって繰り広げられる訳だが、この総開帳は干支が丙午歳に当たるところから札所連合会、観音奉賛会が、市観光協会など各団体の後援を得て開催したもので、折から観光シーズンとあって、秩父の山野は巡礼参詣者でにぎわっている。

と総説を述べ、以下「秩父観音の歴史」、「札所の中の文化財」、「周辺観光施設」という小見出しで秩父霊場を紹介している。しかしながら、開帳開始後の第一報であり、しかも一週間が経ったのに開帳の詳しい内容は報じられていないため、どのような状況であったかは不明であるが、団体巡拝の申し込み状況やバスの運行予定から巡礼者は増加し始めたと考えられる。

以上のように昭和四十一年の総開帳の状況を見てみると、昭和二十九年の総開帳と似通った傾向がある。各札所は朽ちていた本堂や庫裡、観音堂などの改修に力を入れ、東京都内で宣伝・案内を行い、積極的にPRに努めた。その結果、巡礼者も地元の話中を始め遠隔地からの申し込みが舞い込んでいる。そしてバス巡拝が本格化した。巡礼の目的も信仰とは別に文化財巡りや写真撮影を目的とする人も出始めている。

二、三の札所に残された芳名帳による巡礼者の数を見ても、昭和三十年代は百人単位であったものが、四十年代に入ると数千人単位となり、

大幅に増加するようになる。⁽¹³⁾ それは昭和四十一年の総開帳がきっかけになったものと考えられる。昭和三十年代後半の我が国は経済成長期に入り、新幹線の開通やオリンピックの開催など、社会が急速に発展する時期であった。そして四十年代には個人の所得も「所得倍増論」を実践するが如く上昇した。それを背景に巡礼者も増え始め、行楽を兼ねて札所や山野を被写体にするカメラマニアも登場する。その結果、秩父巡礼の復興は四十一年の総開帳が大きなき金となっている。やがて昭和四十三年には西武鉄道が秩父市に延伸し、自家用車の普及と相重なり巡礼者も増えることになった。

五 昭和五十年代の秩父巡礼

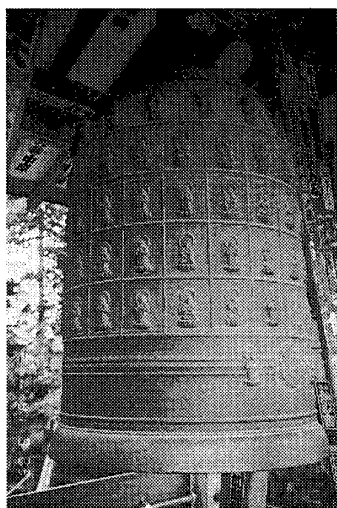
恒例の午歳総開帳は昭和五十三年に開催された。そして昭和五十九年には秩父観音霊場開創七百五十年記念の総開帳が行われた。従って、五十年代には二回の開帳が行われたことになる。昭和五十年以降の秩父巡礼の動向については筆者が既に詳しく考察した。その概略を述べると、昭和五十年の巡礼者は年間一万二〇〇〇人余りであった。翌五十一年からは二万人近くに増え出し、五十年代前半は二万人台で推移し、後半に入ると二万五〇〇〇人前後と増加する。しかしながら、総開帳の年には巡礼者は大幅に増え出し、通常の二倍以上になる。昭和五十三年の総開帳では五万七七一八人を数え、同五十九年には四万九五八五人となっている。⁽¹⁴⁾ また、巡礼者の出身地は地元埼玉県を始め東京都などの関東地方が九〇パーセントを占めている。⁽¹⁵⁾

ところで、『秩父新聞』などを手懸かりに、昭和五十年代の秩父札所や巡礼の状況を検討してみる。昭和五十年代の『秩父新聞』の札所に関する報道記事は、これまでの二回の総開帳時とは異なり、大幅に縮小されている。その理由は同紙を主宰していた第十四番札所・今宮坊の田島凡海師が昭和四十四年に死去したことで、編集方針が変わったことが考

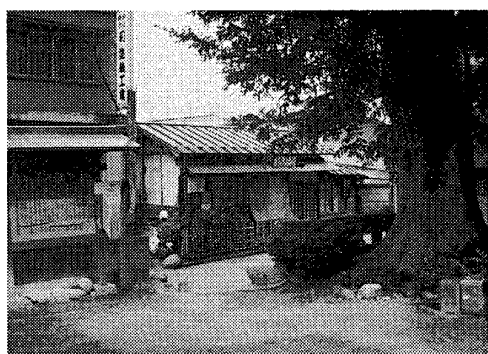
えられる。その後同紙は田島師の養子が後を継ぐが、三年後の昭和四十七年に人手に渡った。同五十六年以降の同紙は公共図書館などにも保存されていない。

さて、昭和五十三年の総開帳については、三月から始まる開帳以前には一月五日付の記事だけである（この頃は月二回の発行）。それによると、「今年（昭和五十三年）は午年・秩父観音総開帳 観光と物産をもPR」という見出しで、「午歳の総開帳は文暦元年甲午（きのえうま）の歳に、播磨国書写山の性空上人が十三権者を従えてはじめて秩父観音順礼を行なった故事に依るもので、秩父札所連合会（町田周道会長）は、秩父観光協会の全面協力のもとに、受け入れ体制をほぼ終え、三月からの総開帳を待っている」と伝え、以下四つの小見出しを付けて札所の概説と準備状態を報じている。札所の概説では「秩父三十四番観音札所の縁起は」と、「秩父札所と妙見宮との関係」の二つの記事が載せられている。それに対して開帳の準備状況を伝える記事は二つある。その一つは、「整備された秩父の観音札所」という見出しで、次のように述べている。

秩父観音札所は所得倍増の拝金風潮の中で無住の札所は風ざらしになり立ち腐れの心配があった。十九番がそれだが、観光協会文化部の托鉢等による募金活動が原動力となつ



第十七番札所・定林寺の梵鐘



今宮坊の納経所中央の民家

て立派に改修された。また札所中珍しい回廊をもつ十六番は檀・信徒の浄財によって境内整備が終え、見違えるほど立派になった。また十二番では本堂を建てかえ、十七番では懸案の平和の鐘樓工事に着手するなど、総開帳を前に受け入れ体制はとどこおりなく進んでいる。

今回も開帳を前に各札所は堂宇や境内の改修、整備を進めていることを報じるものである。特に、第十九番札所・龍石寺は財源の確保が難しく、托鉢による募金などで改修されている。今一つの記事は巡礼者の宿泊に関するものである。それは「宿泊施設もOK」の見出しで次のように述べている。

札所連合会では当初開帳期間を三カ月と予定してきたが観光協会側の申し入れで十月までに延長した。これは春に集中すると宿泊しきれぬ場合を予想しての措置という。旅館や民宿などは総開帳に向けて新増設（みやま旅館、和銅鉱泉）する例もあり、宿泊の受け入れも万全一方、西武鉄道、秩父鉄道をはじめ鉄道関係者も三月からの総開帳に向けて、団体客をつのっており、盛況が予想される。

この記事は巡礼者の受け入れ体制としての宿泊施設を増設し、鉄道会社も団体客を募集していることを伝えているが、併せて開帳期間を大幅に延長することを報じている。期間延長の理由は巡礼者が多く押し寄せて宿泊施設が不足するおそれから、巡礼者の集中を避け、分散させる狙いであった。既述のように昭和五十三年の巡礼者は五万七〇〇〇人余りと急増している。観光協会の予測が当たったのか、それとも開帳期間を延ばしたことで巡礼者が増加したのか、その関係は別にし、この開帳には多くの巡礼者が押し寄せたことは事実である。

総開帳は三月一日から開始されたが、『秩父新聞』はその後の状況について詳しい報道をしていない。三月二十日付（第1641号）に二十三番札所を巡拝する巡礼者の写真を載せ、「午歳総開帳始まる」とだけ

報じている。五月五日付（第1643号）でも巡礼者の写真を載せ、「午歳観音総開帳盛況」と見出しを付けているに過ぎない。しかしながら、開帳から五カ月経った八月十日付（第1649号）には、これまでとは違って開帳に関する紙面を割いている。「やすらぎ求めて札所めぐり 観音総開帳は大盛況 秋にはふたたびブームが」の見出しで、次のように報じている。

秩父観音札所午歳総開帳は予想を上まわる盛況さに関係者は嬉しい悲鳴を上げている程。酷暑に入って一服状態だが、秋ともなれば再び活況を呈すことは間違いない。

このように総説を述べた上で、三つの記事で詳しく報じている。その第一は、「多かつた貸切バスの団体客」のタイトルで次ぎのように述べている。

（前略）当初三カ月の総開帳を予定していたが、（中略）十月末まで実施することになった。二百日を超える総開帳は史上初の試み。

実施間もない頃は寒さも手伝って巡礼者はまあまあであったが、陽春四月から風がおる五月にかけては、連日のように大型バスを利用した団体客が詰めかけ、札所では納経にテンテコ舞いといった風景も見られた。

この記事は開帳の延長と、大型バスを利用した巡拝が多いことを述べている。それに続いて、「荒れた世相が信仰心呼起す」と題して、巡礼者の増加の理由を述べている。

十二年前とは比較にならぬほど巡礼者が多いのは、暴行・殺人・政治汚職などが大手をふるって罷り通る荒れた世相が、信仰心を呼び起し、心のやすらぎを求めて観音巡りを志す人が激増したためとの見方が支配的だが、生活の裕りができた点を見逃すこともできないであろう。

更に「手軽く巡拝できるのが特徴」という小見出しでは、秩父巡礼が

西国・坂東霊場のように他府県にまたがらず、秩父郡に集中して手軽く巡拝できる特徴を述べている。

八月十日付の報道が開帳期間中の記事として最も注目されるが、それによって巡礼者が昭和四十一年の総開帳を大幅に上回ったことや、バスを利用して訪れる巡拝が増えたことがわかる。『朝日新聞』も北埼玉版の三月二日付には開帳開始の記事を写真入りで掲載している。「冷たい風に出足は低調」という見出しで、次のように報じられている。

秩父札所三十四カ所で一日から秘仏・観音さまの総開帳が始まった。一日は朝から冷たい風が吹き荒れ、「春は名のみの秩父路」に繰り込んだお参り客は百五十人そこそこ、低調な出足だった。

開帳は十二年に一度のウマ年に行われる。開帳めざしてやってきた第一陣は静岡県下の観音信仰グループ約四十人。三泊四日で一巡する予定で十一カ所まわった。「梅花服」と呼ぶそろいの御詠歌用札服を着たおばさんたちは札所が設けた「お手綱」を引きながら「寒い、寒い」とふるえていた。

開帳は十月末まで。札所関係者は期間中に例年の倍にあたる約二十万人のお参り客を見込んでいる。

この記事は記者が現地で直接取材した内容になっているので、巡礼者の動向を知るのには貴重である。札所の住職も、当時の盛況さをこれまでに体験したことのない忙しさであった、と語っている。

昭和五十年代には同五十九年に開創七百五十年記念の総開帳も行われている。それについては、『朝日新聞』が二月二十六日付の北埼玉版に写真入りで、「開創七五〇年で大法要 秩父札所」という見出しをつけ、次のように掲載している。

秩父札所開創七百五十年を記念する大法要が二十五日、秩父市東町の札所十三番慈眼寺（柴原保教住職）の観音堂で、札所連合会長の柴原住職をはじめ他の札所住職や管理人ら三十余人が出席して行

われ、(中略)

総開帳に先がけ、同寺は大法要のために同日から厨子(ずし)の扉を開き、本尊の聖観世音像を開帳した。本尊の右手のくすり指に「お手綱」と呼ばれる紅白の綱を結び、この綱を観音堂の前庭まで延ばした。参拝者がこの綱をにぎると、本尊と握手した御利益があると伝えられ、開帳行事の伝統の一つになっている。

「お手綱」が張られた本尊前で、大般若経(だいはんにゃきょう)が転読され、境内に力のこもった統経の聲が響きわたった。他の札所三十三カ所は来月一日、一斉に開帳される。

昭和五十九年の特別開帳は五万人弱と同五十三年の総開帳ほどではないが、それに次ぐ盛況であった。その結果、昭和五十年年代は二回の開帳が行われたことで多くの巡礼者が集まり、本格的に復興したと捉えることができる。そして同六十年代、平成期の一層の発展につながって行くことになる。

おわりに

明治以降衰退していた秩父巡礼が復興する状況を、『秩父新聞』に掲載された記事を手懸かりに昭和二十年代から五十年代までにわたって検討した。同紙の記事の取り上げ方や取材方法には多少の問題はあるが、これらの点は老僧、古老、関係機関などからの聴き取りを行い、当時の状況を捉える試みを行った。

それを要約すると、秩父札所は総開帳を機に朽ちて荒れ果てた堂宇の改修や、境内の整備を行い、参詣者を迎える基盤を整えてきた。その上で、秩父霊場の宣教活動や銀行、鉄道会社の宣伝、商店街の協賛など札所復興の懸命な努力が展開された。他方、社会の発展とともに人々も巡礼に関心を抱くようになり、バスや自動車を利用した巡礼者の数は徐々に増え出すことになった。

秩父巡礼も含め西国巡礼や四国遍路における巡拝者の増加は、昭和四十年代から徐々に始まり、高度経済成長で生活にゆとりの出始めた五十年代には大幅に伸び出す。その背景には、経済的な豊かさによる支出の増加と、精神的なものへの関心が高まったことにある。秩父札所の立地は都市郊外の狭い一カ所に集中し、手軽に巡礼に出かけられる。その巡礼の目的は信仰と観光を兼ねるものが多い。しかも秩父巡礼の特徴は、他の札所霊場がない十二年毎の午歳や特別な行事に行われる総開帳に大勢の参詣者を誘引していることである。江戸時代の秩父札所の経済基盤を支えたのは総開帳(「居開帳」と、江戸での「総出開帳」であった。その開帳は近代以降の荒廃する札所をも救済することになった。札所の堂宇、境内の整備・復興の絶好のチャンスは開帳であった。それをなくして秩父札所の復興を考えることができない。平成十四年の総開帳には、それまで不景気で二万人程度と低迷していた巡拝者は過去最高の七万八〇〇〇人余りを記録している。

小論では明治期の荒廃と昭和期の敗戦による衰退から立ち直る復興の状況を考察し、現在に到るまでの経緯を捉えた。

註

(1) 『松本家御用日記類抄』(秩父市秩父図書館蔵) 第一冊 一七八―一七九項。

(2) 新井佐次郎「近代の秩父札所」『秩父札所の今昔』一二五頁 秩父札所の今昔刊行会 一九六九年。

(3) 太政官布達第三百三十四号は、「無檀ニシテ無住ノ向ハ自今渾テ被廃止候条、(中略)但シ仏像什器ハ本寺法類ノ内最寄寺院へ合附為致、堂宇建物ノ儀ハ最初造営ノ次第ヲ追ヒ、官営ハ公取シ、私造ハ其ノ人民所分ニ可相仕、官私ノ別不明ノ向ハ適宜ニ取計ヒ」の内容であった。

- (4) 『増補 松浦武四郎伝』三〇九頁 松浦武四郎伝刊行会 一九六七年。

- (5) 新井佐次郎 前掲論文 一三九頁。

- (6) 佐藤久光「昭和後期の秩父巡礼」『佛教万華』種智院大学学舎竣工記念論集刊行会 一九九二年、「秩父巡礼の動向・推移」『密教学』第29号 種智院大学密教学会 一九九三年。前田卓・佐藤久光「百観音巡礼（西国、坂東、秩父）の社会学的考察―坂東巡礼と秩父巡礼を中心として」『現代社会の断面』（関西大学経済・政治研究所 研究双書第93冊）一九九五年。

- (7、8) 第十九番札所・龍石寺の上寺にあたる宗福寺の老僧井上孝全師からの聴き取り。

- (9) 佐藤久光「昭和後期の秩父巡礼」二二二頁及び前田卓・佐藤久光「百観音巡礼（西国、坂東、秩父）の社会学的考察」二二頁。

- (10) 喜代吉栄徳「バス及びタクシー巡拝について」『四国辺路研究』第19号 三〇頁 二〇〇二年。

- (11) 新井佐次郎 前掲論文 一二二頁。

- (12) 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』（上）（下）朝日新聞社 一九八七年。

- (13) 田中智彦「昭和30・40年代の秩父巡礼―関東地方からの巡礼者―」『大阪女子短期大学紀要』第15号 一六一―一七頁 一九〇年。

- (14) 佐藤久光「秩父巡礼の動向・推移」三六頁。

- (15) 佐藤久光「昭和後期の秩父巡礼」二二二頁及び前田卓・佐藤久光「百観音巡礼（西国、坂東、秩父）の社会学的考察」二二頁。

- (16) 佐藤久光「現代の巡礼―西国巡礼について―」、前田卓編著『家族社会学ノート』一八五―一八六頁 関西大学出版部 一九八九年、及び「平成期における四国遍路の動向と実態」『神戸常盤短

付記

本稿を作成するにあたり多くの方々にご協力を賜り、感謝を申し上げます。秩父札所連合会々長・柴原保教師、宗福寺長老・井上孝全師、第三十一番札所観音院奉賛会前会長・故近藤昌一氏には聴き取り調査にご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

期大学紀要』第二十二号 六五頁 二〇〇一年。